

2016年8月7日主日礼拝説教（要旨）

聖書：ルカによる福音書14 章15～24 節

説教：「神の招きを受けたのに」 日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ある人が盛大な宴会を催しました。いよいよ予定の日となり宴会の用意がすっかり整ったので、主人は僕を遣わして、あらかじめ招待していた一人一人に「もう用意ができましたから、おいでください」と声をかけたのです。ところが、招かれていた人たちが皆、次々と断ったのです。最初の人、「畑を買ったので、見に行かねばなりません。どうか、失礼させてください」。ほかの人「牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べにいくところです。どうか、失礼させてください」。また別の人は、「妻を迎えたばかりなので、行くことができません」。それぞれに具体的で日常的な理由がついています。けれども、彼らが断った理由は、思いがけない事故とか病気のためではなく、あらかじめ予想できたことばかりです。彼らは、この宴会を自分の都合でキャンセルしても後回しにしてもよいという程度にしか考えていなかったことが分かります。それを聞いた主人が怒ったのは当然のことでしょう。それで、この主人は僕に命じて言うのです。「急いで町の広場や路地に出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい」。そして、僕がそのようにしたけれども、まだ席が余っていると言うと、「通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れてきて、この家をいっぱいにしてくれ」と言ったのです。

これは、宴会に招待を受けた時のマナーを教えている教訓ではなく、神の国のたとえです。主イエスは、このたとえ話を通して、以前から神の御言葉を聞いて神の国の到来を持ち望んでいたのに、時が満ちて今まさに神の御業を始められた主イエスを受け入れようとしないうるファリサイ派をはじめとする高慢なユダヤ人たちに警告しておられるのです。

しかし、このたとえ話は私たちにも語りかけられているのだということを悟らねばなりません。神は今、私たちを神の国の交わりに招いてくださっているのです。主イエス・キリストの尊い犠牲によって罪の赦しの約束をいただいた私たちは、元々何の資格もない者であったにもかかわらず、一方的に恵みによって神の国に招かれています。私たちはこのような恵み深い神の招きを、恐れと喜びをもって受けとめ、それにお応えしようとしているでしょうか。

招かれているのに宴会に出席しなかった人たちは、最初から反抗的であったり悪意を持っていたりしたわけではありません。しかし、招かれている光栄を十分に受け止めていなかったことは確かです。自分の都合を優先し、第一のものを第一にしなかったのです。畑の購入、牛の購入、結婚、それぞれに結構なことであり、いいかげんにすべき事柄ではありません。しかし、この世的な営みと幸いの中で、神を喜ぶことができなくな

っているのです。主イエスが語られたあの「種蒔く人のたとえ」の一節をここで思い起こすことができるのではないのでしょうか。「茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快樂に覆いふさがれて、実が熟するまでに至らない人たちである」(ルカ 8 : 14)。

ある人が、招きを断った三人の言い訳の仕方に注目して面白いことを言っています。最初の人は「見に行かねばなりません」と言い、2番目の人は「調べに行くところです」と言い、3番目の人は「行くことができません」と言って断りました。私たちが断るときの三つの典型的なパターンがここにあるというのです。

第一の「しなければならない」は、概して真面目で責任感のある人ほど、それに縛りつけられてしまっています。だがそれは本当に今、どうしてもしなければならないことなのか。主イエスが訪問先の家で、接待の忙しさに心取り乱している姉妹に言われたように、「あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない」のです(ルカ 10 : 41 口語訳)。

第二の「行くところです」とは現在進行形ですが、これが今進行して現実だから仕方がない、中断できないというのです。しかし、主なる神が安息日を定められて、そこで私たちが自らの業と思いを中断することを教えてくださったように、私たちは目の前のことだけに心奪われるのではなく、神の前に立ち帰って、自分が何を求められているのか、何が最も神に喜ばれることなのかを考えるべきです。

第三の「できません」は自分には不可能だという断りです。しかし、結婚したのなら二人で一緒に招きに応える道はなかったのか。自分の置かれている現実の中で、どんな道が開かれるのか、他にできることはないのかを祈り求めることをやめてはなりません。

私たちはこうした人間的な弁解のとりこになってしまっただけではありません。神は私たちの弁解を超えて働かれるお方です。この世の現実が私たちの偶像となってしまうのではないのでしょうか。私たちは、神がイエス・キリストによってこの世の現実を打ち破り、十字架と復活によって罪の暗闇に光を照らし、敵意の壁を崩してくださった方を信じます。御子イエス・キリストをこの世にお送りくださり、私たちを愛してくださった方が、私たちをどんなに熱心に尋ね求めていてくださるか、弱く貧しい私たちを招き、用いてくださるかを覚えていきたいものです。

このたとえは、「言うておくが、あの招かれた人たちの中で、わたしの食事を味わう者は一人もない」(24節)という言葉で結ばれますが、招きを断った人たちに注目するならば、悲しい物語です。しかし、ここにあるのは宴会の席をいっぱいにするまで招くことをお止めにならないご主人の話です。私たちを無理にでも引き寄せてくださる神の豊かな招きが語られているのです。